

## 主 題：最愛の主の御顔を拝する

聖書箇所：コリント人への手紙第一 16章21-24節

パウロは信仰が弱く、そして、罪深く、また、この世的であったこのコリントの教会に対してこの手紙を送りました。なぜ、パウロはこの手紙を送ったのか？それは間違いなく彼らが主にあって成長することを願っていたからです。だれでも自分たちの愛する者たちの信仰が成長することを願います。この手紙に結びのところで、16：21にはこのように書かれています。「パウロが、自分の手であいさつを書きます。」と。ということは、16：20まではパウロ自身が書いたものではなく、彼のクリスチャンの兄弟であったソステネがパウロのメッセージを聞いてそれを筆記したと私たちは見て取ることが出来ます。1：1に彼の名が書かれています。「神のみこころによってキリスト・イエスの使徒として召されたパウロと、兄弟ソステネから、」と、まさに彼がパウロの口述筆記をしたのです。最後にパウロは自分の手であいさつを書きました。なぜそのようにしたのか？二つのことが考えられます。一つは、この当時、パウロの名をかたってメッセージを語る者たちがいたからです。「これはパウロのメッセージだ」、「これはペテロのメッセージだ」と言って勝手に書いたメッセージをだれかに送ることが起こっていました。だから、パウロは自分の手で「これは私のメッセージだ」ということを明らかに証明するのです。また同時に、パウロがコリント教会の人たちを心から愛していたことを明らかにするためにこのように記したのです。そのことはこの後見ていきます。

## A. のろわれる者 22a節

## 1. 「のろい」とは

確かに、パウロ自身の愛のメッセージであると言っても過言でないと思いますが、そのことを踏まえて22節を見ると少し驚かされます。「主を愛さない者はだれでも、のろわれよ。…」と大変厳しいメッセージが記されているからです。「のろわれよ」なんて私たちは聞きたくないことばですが、このことばは新約聖書中に6回出て来ています。「忌まわしい、憎むべき」という意味があります。つまり、神にとって「忌まわしいこと」、神にとって「憎むべきこと」、そういう人が存在していると言うのです。パウロはこのことばをのろいの対象に対して用いています。のろいを受けるにふさわしい人たちが存在しているとパウロは言うのです。神ののろいの下に置かれている存在、また、さばきの下に置かれている人たちです。

また、この存在についてある辞書は「破滅のために専心している人、そのために尽くしている人、そのためにひたむきな人、熱心な人」という説明をしています。考えてください。自分自身の破滅のために、自分自身の永遠の破滅のために専心している人です。そのために尽くしている人、そのためにひたむきで熱心な人、大変悲しいことですが現実です。この世はそういう人たちで満ち溢れています。ですから、パウロが「のろわれよ」と言ったときにその対象は、自分自身の永遠の滅び、永遠の地獄のために熱心にひたむきに生き続けている人たちのことです。ですから、パウロのこのメッセージはそのような人たちに対する警告です。同時に、その人たちに対して彼らの救いを願ったパウロの愛のメッセージでもあるのです。それはこの後見ていきます。

ですから、パウロが何となくだれかのことが嫌いでその人にのろいがあるようにと言ったのではありません。のろいの下にある人たちが現存している。その人たちは永遠の地獄に向かっている、そのことをもう一度人々に警告し、その歩みの中にあってもそこに救いがあることをパウロは教えようとするのです。

## 2. のろわれる者とは

いったい、だれが神ののろいの下にあるのか？だれが永遠の滅びに向かっているのか？22節にはその説明がされています。「主を愛さない者はだれでも、」とあります。「だれでも」という以上例外はないのです。神ののろいの下にある人、永遠の滅びに向かっている人は「主を愛さない」すべての人たちだと言うのです。私たちが考えなければならないのは、「主を愛さない人とはどんな人か？」です。

## 1) 主を愛さない者

では、逆に「主を愛する人」とはどういう人でしょう？「父なる神を心から信じてその教えに従順に従おうとしている人」です。なぜそのようにするのか？神を愛しているからです。では、「主を愛さない人」は全く逆のこと、ということは、その人はこの真の神を信じようとしないし、神の教えに逆らい続けている人です。神を愛することもない、神を信じることもない、そして、その教えに従おうともしていない人たちです。

明確にしておきたいことは、私たち信仰者は救いに与った後、信仰者として歩み始めたわけですが、だからと言って、すべての罪から完全に解放されているのでしょうか？救われた後も同じような罪を繰り返して行きます。ここでパウロはそのような人のことを言っているのではありません。なぜなら、あなたの心の中には神への愛があるから、その愛が神に喜ばれる生き方をしたいという願いをもたらすのです。それはあなた自身が救いに与っていることの証拠です。では、ここで言わんとしていることは何でしょうか？この「愛」ということばを見ればいいのです。

「愛」と言えば、先ず神の愛「アガペー」が浮かんで来ます。神ご自身が一方的に私たちに示してくださった完全な愛です。そういう愛をもって愛さない者は…とパウロが言っているのか？実は、そうではありません。ここで使われている愛は「フィレオー」の愛です。友人に対して私たちが抱く愛、「彼らのことが好きだ」という感情を表す愛です。つまり、「主を愛さない者」とは私たちが友人に対して持つような愛すらも主に対して持っていない人たちのことです。それが救われていない人の特徴なのです。すでに、私たちはIコリント12：3でこのような主のみことばを学びました。「ですから、私は、あなたがたに次のことを教えておきます。神の御霊によって語る者はだれも、「イエスはのろわれよ」と言わず、」、つまり、救いに与っている者たちは絶対に「イエスはのろわれよ」と言うことはないということです。「イエスはのろわれよ」とはすでに学びましたが、主イエスは神、また、救い主、そして、主であられるという真理を否定するだけでなく、主が神ののろいに値するほど汚れたお方であることを意味しています。

救われている人はだれひとりとしてそんなことは言いません。考えもしません。救いとは新しく生まれ変わることです。これまで「イエスはのろわれよ」と言って来た者が生まれ変わることによって、そんなことは決して口にしないのです。確かに、私たちの主に対する愛は不完全です。自分自身に「神を愛しているか？」と問い掛けるなら「はい」と答えても、実際の自分の歩みを見たときに余りにも情けなく感じることはありませんか？「なぜ、これほど主のみこころに逆らうのか？」「なぜ、こんなに人前に罪を重ねていくのか？」と。

あなたがそのように思うということはあなたの中に主への愛があるからです。この神を悲しませたくない、この方が喜ばれることを行っていきたいのです。確かに、神が私たちに示してくださっているアガペーの愛から言えば、私たちの愛は程遠い愛です。しかし、そのようなアガペーの愛がないにしても、友人に対して持つ感情的な愛は私たちの中にあります。皆さんの心にあるでしょうか？それがあなたが救われていることの証拠なのです。パウロはそのことを言っているのです。ですから、もし主が「あなたはわたしを愛するか？」と問われるなら、私たちは「はい、私があなたを愛することはあなたがご存じです。」とそのように答えるはずです。「余りにも不完全です。余りにも失敗だらけです。余りにもあなたを悲しませることの多い者です。でも、神さま、私の中には愛があります。アガペーの愛ではないけれど私はあなたのことが大好きです。」と、ちょうどペテロが答えたように…。そのようにあなたが答えるのはあなた自身がこの主によって救われているからです。主によって新しく生まれ変わったからです。

ですから、パウロが語ったこと、友人を愛する愛さえも持っていないならその人は例外なく神ののろいの下にある、永遠の滅びの道を歩んでいると言うのです。この「主を愛さない者」は神ののろいの下にあると今私たちはパウロのことばを見て来ました。もう少し、この神ののろいの下にある人、神ののろいの対象となっている人について考えてみましょう。

## 2) 主を憎む者

「愛する」ということばを考えたときにその反対のことばは「憎む」です。このように辞書は定義しています。ということは、「主を愛さない人は主を憎む人」と言えます。考えてみましょう。私たちを罪から救うために人としてこの世に来てくださり、私たちの身代わりとして罪のさばきを受けてくださった救い主イエス・キリストをどうして憎むのか？です。「憎む」とは私たちが主として愛する価値がこちらにはない、このイエスは信じるに値しないと、そうして主に対して侮辱し続けることです。なぜ、そんなことができるのか？「信じない」とはまさにそうです。主が完全な救いを備えてくださるのにみな「要らない」と言うのです。あなたの身代わりとなって十字架で死んでくださったこの真唯一の神が、ご自分のいのちを犠牲にしてくださったのに、そのことへの感謝もないのです。

なぜ、この主をこんなにも憎み続けるのでしょうか？考えたことがありますか？もっと言えば、それがあなたであり私だったのです。主の救いのことを聞いても全くありがたく感じなかったのです。主の犠牲を聞いてもそれに全く感謝をしなかったのです。「私には必要ありません」とそのような応答をして来たのです。なぜ、こんなことが実際に起こるのか？その答えを知っています。それは、人間とは神を憎む存在だからです。神を信じたくないから信じないのです。信じたいのに信じることができない…そんな人はいません。信じたければ信じます。私たちはみなやりたいことをします。

残念ながら、私たちはみな神を憎む者として生まれて来たのです。そういう存在なのです。それが私

たち人間の問題の核心なのです。罪の元凶、また、その根源です。私たちの内側に神を憎む思いがあるのです。それが私たちだと言います。確かに、そのことをみことばが教えています。パウロがローマ1：20で言ったように「神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。」と、神がいることはみな知っているのです。私たちは神が造られた自然界を見たときに、確かに神がそれらを造られてそれを保っておられる創造主なる神がおられることを知ります。「弁解の余地はない」とみな知っていると言います。問題は21節「それゆえ、彼らは神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなりました。」と、神がいることは知っているもその神を神として認めたくないのです。これが人間なのです。

1：28を見てください。「また、彼らが神を知ろうとしたがらないので、…」とあります。神がご自身を私たちから隠しているわけではありません。ご自身を明らかにしてくださっているのに私たちが「No Thank you」と言い続けているのです。それが人間の問題なのです。ですから、その後、「…神は彼らを良くない思いに引き渡され、そのため彼らは、してはならないことをするようになりました。」と人々は益々悪い行いに引き渡されていきます。30節「そしる者、神を憎む者、人を人と思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者、」、「神を憎む者」とあります。

ですから、人間の最大の問題、最大の罪とは「神を何ものよりも、自分自身よりも愛さないこと」です。神よりも自分を愛する、神よりもそれ以外のものを愛するということです。ですから、人間はそれが罪だと良心の呵責を感じていても、そして、人からそれは神に逆らうことだと言われたとしても、私たちはやりたいことをするのです。ヨハネ3：19、20に書かれている通りです。「19 そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行いが悪かったからである。20 悪いことをする者は光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。」と。

私たちの問題は自分の罪を愛するゆえに自分の好きなように生きていきたい。だから、神のところに行こうとしないのです。なぜなら、神の許に行けば神に服従することを要求されるからです。自分のしたいことが出来なくなってしまう、自由が奪われてしまう、楽しみを奪われてしまう、だから、行きたくないのです。それが人間の問題なのです。だから、神を愛さないだけでない、明らかに私たち人間は神を憎んでいるのです。どうして人間は神ののろいに値するのか？そのことがお分かりになったでしょう。昔も今も、この世は救い主なる真の神を信じたくない人々、主がいのちがけで備えてくださった救いを「自分は必要としない」と拒み続ける人々が溢れています。悲劇です。今のあなたならお分かりでしょう。私たち人間にとって最も大切な救いを神が備えてくださったのに、その救いをみすみす自らの意志で拒み続けている。何と愚かな何と恐ろしいことを人々は行っているのでしょうか。主を愛さない、だから、のろいの下にあると。主を憎んでいるからその人はのろいの下にあると言うのです。

### 3) 主の敵

残念ながら、生まれながらの人間はみな「主の敵」だということです。みな神の敵として生まれて来たのです。

・**その存在** : そのことが事実であることを詩篇の著者はこのように言っています。詩篇68：1「神よ。立ち上がってください。神の敵は、散りうせよ。神を憎む者どもは御前から逃げ去れ。」と。神の敵、神を憎む者たちです。

・**世を愛する人** : 神の敵が存在することはみことばが教えます。それはどのような人か？ヤコブは「世を愛する人」だと言っています。ヤコブ4：4「貞操のない人々。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友になりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです。」と。神よりもこの世を愛するのです。その人たちは神の敵だとヤコブは教えました。

・**人間はみな神の敵として生まれた** : ローマ5：10「もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。」、私たちクリスチャンは神と和解させていただいた者たちです。その和解を神は備えてくださり、和解へと私たちを導いてくださったのです。みな神との和解が必要な者たちです。なぜなら、みな例外なく私たちは神の敵として生まれ神の敵として生きて来たからです。だから、私たちは神の敵のかしらであるサタンと運命をともにするのです。

マタイ25：41には「それから、王はまた、その左にいる者たちに言います。『のろわれた者ども。わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火に入れ。』」、地獄がサタンのために用意されている。そして、その永遠の地獄にサタンを愛してサタンに従った神の敵はそこへと導かれていくのです。黙示録20：10、15を見ましょう。「10 そして、彼らを感じた悪魔は火と硫黄との池に投げ込まれた。そこは獣も、にせ預言者もいる所で、彼らは永遠に昼も夜も苦しみを受ける。」、「15 いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。」。

今見て来たのは、パウロはなぜこんなメッセージを与えたのか？です。皆さんお分かりですね。神にのろわれている者たち、神ののろいの下に置かれた人たちがいるからです。そして、なぜ、彼らは神の怒りを受けるのか？神の公正なさばきを受けるのか？その理由が分かりました。彼らは神を愛さないからです。神を憎むからです。神の敵として神に逆らい続けているからです。こういうことです。神を愛していないから神が喜ばれることをしないのです。神を憎んでいるから神が憎まれることをするのです。そして、神の敵だからそのかしらであるサタンの喜ぶことだけをするのです。それが私たちです。それが生まれながらの私たちです。だから、私たちは神のさばきを受けるにふさわしい者だ、さばきを受けて当然だ、神ののろいの下に置かれて当然だ、なぜなら、そのような者でそのように生きて来たからだ。その真理をパウロはここで明らかにするのです。

## B. 再臨 22b節

その後を見ると「再臨」のことを話します。「…主よ、来てください。」と。皆さんがお使いの第二版の聖書には下の引照に《ギリシャ語「マラナ・タ」》とあります。実は、これはアラム語です。この「マラナ」とはアラム語で「私たちの主」という意味です。「タ」あるいは「サ」はアラム語で「来る、来てください」ということです。

### 1. 再臨への希望

ですから、明らかにこのことばは「再臨への希望」を表しています。私たちが疑問に思うのは、これがアラム語だとするならばギリシャ語圏のコリントの人たちにこのように言ったのか？ということ。意味が分からないのではないかと。なぜ、パウロは敢えてここでこのことばを使ったのか？理由があります。レオン・モリス先生は「これは初代教会が重要視していた感情を表していたに違いない。そうでなければこの外国語はこのような形でギリシャ語を母国語とするクリスチャンたちによって受け継がれるはずは決してなかった。」と言います。確かに、アラム語かもしれないが言っていることはみなよく分かったのです。私たちクリスチャンが「ハレルヤ！」と言ったときに、「アーメン」と言ったときにその意味が分かります。日本語ではなくてもその意味は分かります。モリス先生はこう続けます。「これは初代教会が覚えていた主の速やかな帰還を熱心に待望する思いを表すものだろう。」と。

このことばはクリスチャンの間では意味が分かったのです。主に早く帰っていただきたい、そのことをみな願っていた、それを表すことばだったのです。ですから、何語であっても意味が分かったのです。そのことばを口にするによって「本当に主に早く帰っていただきたい、その時を待ち望む」と人々はこのことばを使いながら励まし合っていたのでしょう。というのは、テサロニケ教会にパウロが送った手紙に「主の再臨」、特に「空中再臨」のことが記されていますが、Iテサロニケ4：18に「こういうわけですから、このことばをもって互いに慰め合いなさい。」とあります。イエスが帰って来られるという真理をもって慰め合いなさいと言うのです。テサロニケのクリスチャンたちは大変な迫害を経験していました。その中で彼らはその迫害に耐えていったのです。「主がもうすぐ帰って来られる、もうすぐ主にお会いできる。だから、妥協しないで主に仕えていこう」と励まし合っていたのでしょう。

私たちの最愛の主にお会いしその御顔を拝する、この希望は私たちキリスト者の信仰を励まし、私たちに勇気をもたらすものです。もうまもなくすると私たちはこの主の御顔を拝するのです。皆さん、その時を楽しみに心待ちにしておられますか？十字架で私のために死んでくださった主にお会いできるのです。

1894年の夏にあるバイブルカンファレンスが開かれていました。そこに有名な伝道者であったD・L・ムーディーがいてその会衆の中にたくさんの讚美歌を書いたファニー・クロスビーを見つけます。そして、彼女に証を依頼しました。ふいを突かれた彼女は何をしたらいいのか分からず最初は拒みましたが、前に立ったときにこんなことを言いました。「私の書いた讚美歌の中で今まで一度も公開されたことがない曲が一つあります。私はそれを『私のたましいの詩』と呼んでいます。悩んだ時は心に慰めをもたらすためにこれを繰り返します。」と、その繰り返した詩が後に歌になります。聖歌640＝いつかは「さらば」とわが友すべてに、言うときありともわが心安し、御顔を拝してわれは告げまつらん、恵みにわが身も贖われたりと＝イエスにお会いするそのときのことを歌っています。確かに、この地上での生活はいつか終わるのです。そうすると、今私たちが賛美しているように歌うことはない、彼女はそのように原詩では書いています。こう続きます。「しかし、王の宮殿で目を覚ますときの喜びはいかほどか」と、彼女はちゃんと主にお会いするその時がどんなものか、どんなにすばらしいものかを忘れることはなかったのです。確かに、日々の生活にはいろいろなことがあるでしょう。でも、私たちにはこのすばらしい約束がもう与えられているのです。私たちは王の宮殿で王の前に立つことができるのです。だから、コーラスはこう続きます。「私は向き合って主の御顔を拝する。私はこの方の御顔を横からでもなく後ろからでもない、向き合って拝する。そして、恵みによって救われた。」と。「神さま、感謝します。こうして私をこのすばらしい祝福に招いてくださった。それは私が何かをした

からでないし、私がどんな人間であるかに全く関係なく、私はのろいの下に置かれていた存在だった。主を愛する者ではなかった。主が憎むことを喜んで行う者であり神の敵であった。でも、そんな私を救ってくださった。」と言ってこの方を誉め称えるのです。この真理が彼女を励ましたのです。

あるものによれば、この詩が朗読されたときに、そのキャンプに集っていた人たちの中で涙を流していなかった人はいなかったとあります。信仰者の皆さん、これが私たちの希望です。私たちはイエスにお会いするのです。今日お会いするかもしれない？でも、確実に言えることは、この方の御顔を私たちは拝するのです。この方を見て私たちはこの方の前にひざまづき感謝をするのです。「主よ、こんな者を救ってくださって感謝します。」と。それが希望です。それが信仰者の希望だったのです。そうして生きたのです。忘れていませんか？あなたはそのことを…。自分の周りのことばかりに目がいってしまって、こんなすばらしい約束を主が与えてくださったことを忘れていませんか？

この「マラナ・サ」ということばが初代教会の信仰者たちを励ましたように、私たちも「マラナ・サ」「主よ、来てください」とそのことばをもって励まし合いながら、主の再臨を待ち続けていくのです。そのときに、私たちの最愛の主にお会いしてその方の御顔を拝するのです。

## 2. 再臨への警告

この祝福は私たち信仰者にとって大きな祝福ですが、最初に言ったように、みんなにとって祝福ではありません。主を愛さない者たちにとって、主を憎む者たちにとって、主の敵である者たちにとって、これは大変恐ろしい日です。Ⅱテサロニケ1：7、8「：7 苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えてくださることは、神にとって正しいことなのです。そのことは、主イエスが、炎の中に、力ある御使いたちを従えて天から現れるときに起こります。：8 そのとき主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。」、何のことか？「力ある御使いたちを従えて天から現れるときに」と、イエスが地上に帰って来られるときのことです。そのときイエスは何を為さるか？さばきをもたらすのです。神に逆らい続けていた者たち、彼らがそれにふさわしいさばきを受けるのです。

パウロは「主よ、来てください」と確かにクリスチャンにとっては希望、喜びの日です。しかし同時に、主がこの地上に帰って来られるその日は、神の敵にとって大変恐ろしい日です。なぜ、パウロはこのメッセージを語ったのか？なぜ、人々は神ののろいの下にあるのか？そのことを語った後に再臨のことを語りました。恐らく、パウロの中にこんな思いがあったのでしょうか。それは「救いの機会があるうちに救いを受け入れなさい」ということです。救いを逃してはいけないということです。確かに、多くの人たちは主の十字架を見ても、その死から完全によみがえったイエスのことを聞いても、その方を受け入れようとしません。そこでパウロは警告するのです。「あなたがたは間違っている。しかも、この後、あなたがたの罪に対してそれにふさわしいさばきの日が来る。しかし、感謝なことに、今はまだ神はその救いを備えてくださっている。まだ救いはある。だから急いで、自らの罪を悔い改めて主の前に救いを求めることだ。」と。間違いなく、パウロはそのことを願っていたのです。

パウロはどこに行ってもイエス・キリストの福音を語りました。コリント教会がどのような教会かは彼はよく知っていました。その中にクリスチャンだと言いながらそうでない人たちが居たことも知ってし、教会の中に入り込んで来た間違った教師たちがいることも知っていました。パウロのことを悪く言う敵もいました。そのパウロが言うことは「確かに、イエス・キリストは帰って来られる。そして、のろいの下にある人々に対してふさわしいさばきを与える。その日が近づいているゆえに備えなさい。その救いをいただきなさい。」です。

神は旧約聖書の中でも新約聖書の中でも、すべての罪人が救いに与ることを願っておられます。エゼキエル書18：23－28にこのように書かれています。「：23 わたしは悪者の死を喜ぶだろうか。——神である主の御告げ——彼がその態度を悔い改めて、生きることを喜ばないだろうか。：24 しかし、正しい人が、正しい行いから遠ざかり、不正をし、悪者がするようなあらゆる忌みきらうべきことをするなら、彼は生きられるだろうか。彼が行ったどの正しいことも覚えられず、彼の不信の逆らいと、犯した罪のために、死ななければならない。：25 あなたがたは、『主の態度は公正でない』と言っている。さあ、聞け。イスラエルの家よ。わたしの態度は公正でないのか。公正でないのはあなたがたの態度ではないのか。：26 正しい人が自分の正しい行いから遠ざかり、不正をし、そのために死ぬなら、彼は自分の行った不正によって死ぬ。：27 しかし、悪者でも、自分がしている悪事をやめ、公義と正義とを行うなら、彼は自分のいのちを生かす。：28 彼は反省して、自分のすべてのそむきの罪を悔い改めたのだから、彼は必ず生き、死ぬことはない。」、33：11にも「彼らにこう言え。『わたしは誓って言う。——神である主の御告げ——わたしは決して悪者の死を喜ばない。かえって、悪者がその態度を悔い改めて、生きることを喜ぶ。悔い改めよ。悪の道から立ち返れ。イスラエルの家よ。なぜ、あなたがたは死のうとするのか。』」と。どれ程神は罪人たちがその罪を悔い改めてこの救いを心から迎え入れることを願っておられるか？お分かりになったでしょう。神は待っておられるのです。

18:25に「あなたがたは、『主の態度は公正でない』と言っている。」とありますが、そこで神は「主は公正だ」と言われます。なぜなら、人が罪を犯すならそれにふさわしい報いを受けるということです。その公正なさばきを下される神を責めることができますか？やったことの報いを受けるのは当然のことではないですか？さばきを下したから神は不公平だと言えますか？神が言われることは「もし、あなたが自分の罪を悔い改めるならすぐに赦します」です。でも、その救いを拒み続けるなら、あなたは自分のしたことの報いを受けるのです。神は不公平なお方ではありません。言われたことを正しくその通り為さるのです。

皆さん、あなたはみことばを聞いて福音を聞いてそれを信じようとされた。もちろん、何度も学んでいるようにそれは神のみわざです。あなたは神に対して自らの罪を悔い改めてイエスを信じるという選択をされました。その結果、神はあなたに何を与えてくださいましたか？完全に永遠に罪を赦してくださいました。そのように神は約束されたからです。では、神の救いを拒み続けた人が永遠の地獄に行ったときに「神は不公平だ」と言えますか？神は言われたことをその通りに為さる真実な方です。だから、私たちはこの神のことばを聞かなければならない、神のことばに心を開かなければならないのです。赦しを求める者には赦しをくださる、赦しを拒む者にはそれにふさわしいさばきをお与えになるのです。それが神です。

パウロはこうしてのろいの下にある人たちに対して、救いのチャンスがあるうちにその救いをいただきなさいと言います。そして、私たち救いに与った者たちはその日を待望しながら、与えられた一日一日をしっかりと歩いていくようにと。

### C. 最後のことば 23-24節

#### 1. 主の恵み 23節

恵みのことが記されています。「主イエスの恵みが、あなたがたとともにありますように。」と。クリスチャンのあいさつですが、考えてみると、私たちが信仰者として生きていくために主の恵みが不可欠だということです。言い方を変えるなら、神の助け、神の力が私たちには常に必要だということです。私たちは神の助けがなければ救いに与ることはなかったからです。神が救ってくださいましたのです。救いに与った私たちも同じです。神の助けによって力によって、つまり、神の恵みによって私たちは生きていくのです。私たちが神に対して従順に生きていくために必要なものはこの「神の恵み」です。だから、パウロは「主イエスの恵みが、あなたがたとともにありますように。」と、ひとり一人が恵みに基づいて、恵みをいただきながら歩いていくようにと言うのです。

#### 2. パウロの愛 24節

今度は「愛」のことを話します。しかも、それは「パウロ自身の愛」だと書かれています。24節「私の愛は、キリスト・イエスにあつて、あなたがたすべての者ととともにあります。\*アーメン。」と。「アーメン」に\*印が付いています。欄外の説明では「異本「アーメン」を欠く」とあります。確かに、新改訳聖書の第2版と第3版には「アーメン」と書かれています。2017年版と口語訳、文語訳には「アーメン」は記されていません。なぜ、こういうことが起こるのか？翻訳するギリシャ語の聖書に書かれているかどうかです。書かれているのも書かれていないものもあるのです。何を使って翻訳したのかということです。アーメンがあるから、また、ないから、語られたみことばの信憑性を疑うことにはなりません。神が私たちに与えてくださったのです。パウロ自身がこの最後のところは自分の手で記したと言います。でも、それまでのメッセージもパウロ自身が主からいただいたメッセージを語ったのです。

24節には「パウロ自身の愛」と書かれています。思い出してください。この手紙が記された理由です。最初に学びましたが、実は、パウロはコリント教会から様々な質問を受けたということでした。それにパウロが答えていきました。同時に、パウロはこの手紙の中でコリント教会の罪を指摘し、彼らとその罪から悔い改めることを命じている箇所がありました。そして、そのすべてを通して最後に言うのです。「このように記して来たのは、実は、私自身があなたがたのことを愛しているからだ。」「私の愛は、キリスト・イエスにあつて、あなたがたすべての者ととともにあります。」と。ということは、私たちはこの手紙を通して今一度、私たちクリスチャンの愛とは何かを学ぶのです。その人たちの聞きたいことを語るのが愛なのか？心で思っていないけれど彼らを喜ばせるために…。何となくそれが愛であるかのように勘違いしていると、もし、そうならそれは愛ではありません。パウロはそんなことを一度もしていません。

この手紙を通してパウロが私たちに教えてくれる愛は、互いに尊敬をもって感謝し合うものです。互いにその労をねぎらい合うものです。互いの信仰の成長のために助け合うものです。そして、時には互いの罪を指摘し合うものです。そのようにパウロはコリント教会の人たちと向き合ったのです。そして、パウロは教えるのです。それが「愛」だと。



私たちはみなまだまだ信仰の成長過程の中を歩んでいます。成長を助け合っていくことが必要です。こうして神が兄弟姉妹を与えてくださっているということは、助け合うことが必要だからです。そのために、もし、私たちが個人としても教会としても次のようになることができれば素晴らしい！それは何か？ひとり一人が愛する兄弟姉妹に対して「私が改めなければならないところをぜひ教えてほしい。私が間違ったことを言ったり行ったときはぜひ教えてほしい。」と仰うことです。

なぜなら、私たちはまだまだ成長しなければならぬからです。私たちは変えられて行かなければならぬからです。変えられるために必要なことは、私たちの弱いところを指摘されることです。「あなたはここを変えなければいけない」と教えられることではないですか？そして、私たちが実際に自分の弱さや罪を指摘されたなら「〇〇兄弟、〇〇姉妹、感謝します。私に必要なことを教えてください…」とそれを心から感謝するのです。ですから、私たちの祈りは「主よ、どうか私を変えてください」という祈りです。そういう祈りをささげ続ける信仰者でありたいです。この祈りをささげる人は「神さま、私を変えてください。私はもっと成長したいし、もっとあなたに似た者に変えられていきたい。」という思いがあるのです。「私は大丈夫、すべての点で大丈夫」ともしそういう人がいたら、主はその人をどのように思われるか？です。

よく考えると、私たちは人を変えることに時間を費やしていませんか？「あの人を変えて欲しい、この人を変えて欲しい」という祈りはあるのです。でも、「自分を変えてください」という祈りはありますか？私たちが費やさなければならぬのはそこです。私たちはキリストをこの世に明らかに示すために生かされています。それなら自分を変えられなければなりません。私を変えられること、私が教えられること、私が人々に鮮明にこの私たちの愛する主を示すことが必要なのです。こんな祈りをしている人は「私の足りないところを教えてください、私が改めなければならないところを教えてください」と言います。そして、それを指摘してくれたときに感謝をするのが大切で、もしかすると、私たちはしないかもしれない。「なぜ、そんなことをあなたに言われなければいけないの！あなたより私のほうがすごいでしょう！」と。この問題が何かはお分かりですね？プライドです。罪です。

私たちがイエスを信じて救いに与った。主はあなたに関心をもってくださりあなたのために働きを為して、あなたを変えようとしてくださっています。私たち自身が「主よ、変えてください」という祈りをもってみことばに従うことです。そして、そのように生きている人が霊的な人です。

24節は原語では最後に出ていることばが「キリスト・イエス」です。それで16章が締め括られています。パウロはそのように記すことによって、彼自身がキリストの模範に倣ってこの方に喜ばれる人生を生きて来た、そのことをあたかも今一度私たちに教えてくれているようです。キリスト・イエス、この方が私たちの模範です。この方のために生きるのが私たち信仰者なのです。この方がお喜びになることを自分の喜びとして生きる、それが私たち救いに与った者たちです。パウロはそのように生きました。皆さん、あなたにとってイエスはすべてでしょうか？最も大切な存在でしょうか？自分のいのちよりも…。イエスはそれにふさわしいお方でしょう。すべてを捨てて私たちにこの祝福をくださったからです。神ご自身がそのような犠牲を払ってくださった。

このイエスを誇りとして、このイエスを心から愛して、このイエスの模範に倣って、そして、イエスが示してくださった愛を実践する、そんな信仰者に、そんな教会に変えられることです。それがあなたの願いであること、教会の願いであること、そのことを心から願います。「主よ、私を変えてください。あなたのすばらしさを証する器として私を変えてください。」と、その祈りをもって主のみことばに従い続けていきましょう。